エッセイ「少年ギャング団」

川越ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エッセイ「少年ギャング団」

【Ｎコード】
Ｎ８７８７Ｊ

【作者名】
川越ふみ

【あらすじ】
お笑いエッセイ書いてみました。

（前書き）

小説ではなく、エッセイです。

自分は今だから言えるが、子供の頃は相当のワルだった。ちっちゃな頃からワルガキで、１５で不良と呼ばれてはいなかったが、ワルというワルはしつくしてきた。その中でも最大の悪事は、『ピンポンダッシュ』だ。『ピンポンダッシュ』。人の家のインターホンを押し、速攻で逃げるだけという『悪事』と書いて『イタズラ』。そしてその『ピンポンダッシュ』というナイスなネーミング。何がいいってその言葉の響きがいい。これを命名した人は、かなりのセンスの持ち主だと思われる。人捜しの番組に応募し、その人を見つけたい位である。

小学2年生だった当時、クラスの仲の良い自分達のグループでは、その『ピンポンダッシュ』がインフルエンザ並に大流行していた。その理由は、何も用意する事なく、なおかつお金を1円も掛けずして簡単にスリルを味わえるゲームだったからだろう。『ゲーム』という表現はおかしいが、その頃は『ゲーム』という感覚でしかなかった。

そのゲームは、友人同士でやるから意味があるもので、一人でやっても全く面白くないものだった。それは、むしろ逃げきった後の友人達との雑談がこのゲームのメインだったからだろう。

このゲームの役割分担は、たった2通りしかない。インターホンを押す役と、それを少し離れた所で見守っている役の2つに1つだ。自分は、このゲームで最も重要なインターホンを押す役を自らかって出ていた。その当時、インターホンを押す奴が一番勇気があって、カッコイイと思っていたからだ。それに、何より目立ちたかったという事もある。

その日もいつものように5人程の友人達と、その名の通り、ピンポンをしてはダッシュ、ピンポンをしてはダッシュを繰り返していた。既にインターホンを押す事に手馴れてきた自分は、次のターゲ

ットの家でも余裕でインターホンに一差し指を当て、目で友人達とのタイミングを計った。「ピンポン♪」というインターホンの音がいわばスタートの合図で、その音が鳴るのを友人達はドキドキしながら待っていた。

そして、さー、押すぞという時に、ありえない事が起きた。いきなり、玄関からその家のおばさんが出てきたのである。予期せぬ事態に、自分を含む友人達全員は余裕の表情から一変、目が点になった。おばさんは、そんな自分達を見るなり、「どうしたの？」と一言。一番近くに居る自分は、おばさんの表情と、その「どうしたの？」というイントネーションで、『只今、ピンポンダッシュ開催中の風景』という事を察知されていないと判断し、こう言った。

「・・・ボールが入っちゃって」

今思うと、なんて頭の転換の早さだったのだろうか。この間、ほんの0、何秒だと思われる。そしてこの天才的アドリブ。家の目の前には公園があり、なんの違和感もない。しかし、そんな天才的アドリブは友人達の方が上だった。その状況を一早く察知した友人達は、「確かこっちの方だったよなー」と、『ボールがこっちに飛んできちゃったコント』を真顔で始めだした。その劇団を見て信じたというか洗脳されたおばさんは、ボールを一緒になって探し始めてくれた。そして友人達と少し探すフリをした後、またタイミングよく一人の友人が、「やっぱりこっちじゃなかったんだよ」と帰るキッカケを作るセリフ。決してこういう時の為のマニュアルがあった訳ではなく、全てはアドリブである。そして自分達は何事もなかったように、なんならボールをなくしてヘコんで帰るくらいの空気で帰って行き、おばさんの中では今でも自分達の事は、爽やかな、そして好感さえもてる少年野球団なのだろう。

その日以来、『ピンポンダッシュ』をする事はなくなった。『ピンポンダッシュをやろう』と言い出す奴もいなかった。あの日、自分達の事を何も疑う事なく、あるはずもないボールを一生懸命探してくれているおばさんの背中を見て、何か思ったからであろう。そ

して、少し大人になった自分達がそこにはいた・・・。

（後書き）

くだらないエッセイをお読みいただき、ありがとうございました。
ご感想をいただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8787j/

エッセイ「少年ギャング団」

2010年10月21日21時22分発行